

見本

学校推薦型選抜Ⅰ

帰国生徒選抜

社会人選抜

令和8年度

小 論 文

芸術文化学部 芸術文化学科

(募集区分b)

注 意

1. 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題は、3ページにわたっています。
3. 解答用紙は1枚、下書用紙は1枚です。
4. 開始の合図があってから直ちに問題冊子、解答用紙、下書用紙を確認し、不備がある場合は監督者に申し出てください。
5. 解答用紙の所定の欄に、受験番号を算用数字で記入してください。氏名を書いてはいけません。
6. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄に記入してください。解答用紙の所定の欄以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としません。
7. 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

実施年月日
25.11.26
富山大

次の文章を読んで後の間に答えなさい。

年ごとに規則正しく繰り返される四季の流れを鋭敏な感覚で捉え、そこに深い共感を覚える日本人の感受性は、美術のみならず文学や演劇などの分野においても、大きな役割を果している。そのことは特に、和歌、俳句などの伝統的短詩型文学の世界で著しい。日本で最初の勅撰集である『古今和歌集』（九〇五年）は、題名の示す通り古今の名歌を集めたアンソロジー（詞華集）だが、作品は西欧や中国のアンソロジーのように作者別にまとめられているのではなく、春夏秋冬の季節の流れにしたがって配列されている。したがって、同じ歌人が春の巻、秋の巻などいくつもの場所に登場して来ることもしばしば。作者よりも季節の流れの方が重視されているのである。

このような季節による分類と配列は、その後『新古今和歌集』をはじめ代々の勅撰集にも受け継がれ、日本における詞華集の基本的形式となった。『古今和歌集』にわずかに遅れて成立し、優れた詩文の範例集として後世に大きな影響を与えた藤原公任きんとうの『和漢朗詠集』も、同様に春の「立春」から始まる四季別配列を採用している。

俳句の世界となると、季節との結びつきはいっそう顕著なものとなり、おそらく世界のどの国にも類例を見ない「季語」という約束を生み出した。季語には「桜」、「雪」など自然現象に基づくものが当然大きな部分を占めているが、そればかりではなく、「衣更え」とか「煤払い」のように、人事に関するものも数多く含まれる。ここにも、自然とひとつになった日本人の生活意識を読み取ることができよう。明治以降の近代になってからは、「無季俳句」を主張する俳人たちが登場したが、それでもなお、きわめて多くの日本人が伝統的形式による季語俳句制作を楽しんでおり、そのために歳時記が幾種類も刊行されているほどである。しかも、生活様式の変化とともに、季語はますます増えて行く傾向にある。たまたま私の手許てもとにある歳時記には、

二五〇〇語ほどの季語が採録されているが、これほど多くの季節に關した詩語があるということは、外国人にとっては容易に想像できないところであろう。

和歌や俳句の世界だけにはかぎらない。移り変わる自然の微妙な変化に着目して、そこに豊かな美の世界を見出す日本人の繊細な感受性は、広く多くの文学作品や日常生活態度においても、さまざまなかたちで發揮されている。文学におけるその最も優れた例証のひとつとして、『枕草子』冒頭のよく知られた一節を挙げることは、誰しも異存のないところであろう。

春は曙^{あけぼの}。やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫立ちたる雲の細く棚引きたる……

というこの文章は、春の夜明けの爽やかな大氣の中に^{ひろ}拡がる晴朗な自然の姿を、あたかも淡彩による一幅の絵のように鮮やかに描写している。そしてそれに続いて、「夏は夜」、「秋は夕暮れ」、「冬はつとめて（早朝）」と、それぞれの季節について一日のうちで最も印象深い自然の情景が展開される。そこにはまさしく、変化するもののなかに美を見出す鋭敏な感受性の働きの認められる。

四季の運行が一年ごとに繰り返されるように、一日ごとに昼と夜もまた繰り返される。時間は絶えず循環してとどまることなく、それにしたがって自然の姿もまた変化する。春の曙の爽やかな美しさも、秋の夕暮れの美しい風景も、長くは続かない。時間の流れとともに移り変わる自然は、さまざまに変化するその姿を通じて、日本人の心のなかに、美は移ろい^{やす}易いもの、はかないものであり、それ故にいつそう貴重で、いつそう愛すべきものだという感覚を育て上げた。西欧世界においては、人体比例の美学の例に見られるように、ギリシヤ以来美はある一定の基準を満たしているものという考え方が強く、そのかぎりでは美は永遠不

変であるが、日本人にとっては美とはむしろ時の流れとともに消え去りゆくもので、失われゆくものに対する愛惜の思いが、美意識の重要な要素のひとつとなっているのである。

例えば、俳句の世界に「行く春」という季語がある。これは文字通り、春が終りに近づいてやがて夏を迎える季節という意味だが、しかし単に自然現象を述べただけではなく、日本人ならば誰でも、この一語のなかに去って行く春を惜しむ痛切な思いがこめられていることを思わずにはいられない。それなればこそ芭蕉は、『奥の細道』において、長途の旅に出発するため親しい人々に別れを告げる場面に、

行く春や鳥啼き魚の目は泪なみだ

という一句を加えた。季節の運行を止めることはできない。同様に人の別れも避けられない。芭蕉は別れを惜しむ気持ちを鳥や魚に託し、さらに去り行く春の名残りを惜しむ気持と重ねて歌い上げたのである。

高階たかしな 秀爾しゅうじ 『増補 日本美術を見る眼—東と西の出会い』から。送り仮名は原文にしたがった。

問 筆者の考えを簡潔に説明し、あなたが関心のある「移ろい易くはかない美」について、具体的な事例を示しながら七〇〇字程度で述べなさい。なお取り上げる例は、分野を問わない。

見本

下書用紙